

はあるまいか、これが又調査の價値をもつことにならう。半球狀をなす其の姿態と云ひ、堂々たる其の巨軀と云ひ、奇妙に Dharmarajika-caitya (法王塔)のこと、即ちタキシラ附近にあつて菩薩に關する他の一大奇蹟の記念物となり、又其の梵語名から考へても矢張り阿育王の建立に歸すべき法王塔のことを想ひ起させるものである。尙ほ此の塔は、一八七九年にシムソンが其の内部の遺物匣から初代月支 Koushans のものと同時にドミシアン Domitien 及びトラヂヤン Trajan 兩帝の古錢を取り出したことに依て、紀元第二世紀に修繕されたものと考へられてゐるが、それにしても相變らず印度に於ける初期の塔の形態を止め、斷崖の縁に位置すること、高さは其の斷崖を凌ぎ、圓蓋は基脚の周圍七十五米突に餘る程廣大であることなど、風致の點から見ても歴史的に考へても、此の建物は確に重要な地位に立つものである。

前述の通り判定を試みても、要するにそれは「建築のみを見てする假定」と云ふに過ぎないものであるが、それにしても其の假定をどう考へてよいか、遠からずそれが明かになる時期の到來することを希望すべきである。さういふ